

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：34314

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770255

研究課題名(和文)近代イギリス官僚制度改革の国際的影響に関する総合的研究

研究課題名(英文)The Civil Service Reform in late 19th Century Britain and Its International Knowledge Transmission

研究代表者

水田 大紀(MIZUTA, TOMONORI)

佛教大学・歴史学部・准教授

研究者番号：40632328

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近代化の受容について考察するため、19世紀後半にイギリスで行われた官僚制度改革を題材に、改革を支えた社会思想と改革に関する情報の国際的な伝播の二点から、近代社会において行政機構の近代化改革を推進するエネルギーの解明に挑んだ。その結果、官僚制度改革を、改革唱道者たちだけでなく、現役の官吏(女性官吏を含む)や植民地の行政参事会員たちの視点からも描き直すことで、改革の要点であった能力主義の導入がそれぞれの立場に応じて異なる読み解き方をされ、各々の立場や主張を補強するために戦略的に活用された点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the civil service reforms in late 19th century England. The civil service reforms were indicative of significant aspects of the modernization of the social, political and administrative systems in England. Since 1853, the civil service underwent reform. This was a process of modernization in response to change at the time. The reforms caused tensions between the government who wanted both efficiency and economy, and the mass of clerks who felt that those concerning promotion threatened their working and living conditions. The reforms wanted by the clerks were designed to improve their conditions in particular by introducing open competition and improved promotion. I examine the energy for modernization, through two perspectives of social trends and transmission of the information concerning those reforms, and recognize the different consequences between reformers and lower division clerks including female and colonial servants.

研究分野：イギリス近現代史

キーワード：イギリス 官僚制度改革 能力主義 女性官吏 マルタ

### 1. 研究開始当初の背景

報告者はこれまで一貫して、19世紀後半のイギリスにおける官僚制度改革に焦点を当てた研究に取り組んできた。近代において官僚たちは、国家と社会をつなぎ、政治的指導者層と国民とを効果的に媒介する存在であった。そのため、官僚制度にふれることなく、近現代の国家や社会の成長および成熟を語ることはできない。

これまでイギリスの官僚制度およびその改革は近代化との関係をめぐり、制度の合理化を推し進めた推進力について研究が進められてきた。官僚制度を合理的な組織形態と捉える理念的な立場にせよ、病理的な側面に注目する経験主義的な立場にせよ、さらには制度の功罪をその目標とするところとの関連で論じるべきとする機能論的な立場にせよ、既存研究は常に官僚制度の組織的な側面、特に「法制構造」や「政治構造」といった実存的分野を重視してきたといえる。

その一方でこれまでの研究は、近代官僚制度の進展を一国内での動きと捉え、さらに制度の骨格となった官僚側の視点をも軽視してきた。それはそれぞれの社会固有の政治文化を反映する一方で、官僚制度が歴史的、国際的環境のなかで形成されてきたものであることを看過していたからである。

しかし官僚がいない官僚制度など、あり得ない。また近代世界において、社会制度は国際的な状況に影響を受けつつ構築されてきた。ゆえに今後の官僚制度研究が取り組むべき課題は、一国だけではなく、官僚制度とそれに関わった同時代の国内外の人々やその思想を踏まえ、彼らが官僚制度の発達により蒙った変化を包括的に検証することである。これは近年の歴史学研究で重視されてきているグローバルヒストリーや「新しい世界史」との連動を意識しつつ、欧米諸国を中心としつつも世界中で近代化への模索が加速していく19世紀後半から20世紀初頭を中心に、官僚制度改革の相互影響や社会への合理化意識の浸透を通じて、近代世界に対して新しい価値観が普及していく様子を論じる契機になりうると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究では、二つの研究目的を掲げて考察を行った。

(1) 官僚制度改革を助長した社会思想についての比較的分析

一つ目の目的は、官僚制度改革という事態において、誰よりも切実な利害関係をそれにもっていたのは、現場の官僚や官吏たちである。そのため、彼らの協力や理解なくしてはいかなる制度も機能しえなかった。つまり近代における官僚制度改革の意義を解明するためには、官僚たちが官僚制度改革においてどのような役割を果たし、日常的な実践の中で官僚制度をどのように捉えたのかを議論する必要がある。その意味で、本研究の目的

の一つは、官僚制度を助長した社会思想を現役の官僚たちの視点から検討し直すことにある。

(2) 改革に対する国際的な関心、情報伝播

二つ目の目的は、近代官僚制度をめぐる国際的な連環を証明し、一国内のみの変化に収斂しがちな官僚制度研究をグローバルな視点で捉え直すことである。先行研究が主に官僚制度の理念や構造の分析を重視しているのに対し、本研究の特徴は、改革というトピックを通じて他地域との連関や日常的・社会的な思考、同時代性に注目することで、既存の研究に超域的・日常実践的なアプローチを加味し、官僚制度と社会の近代化との関係を解明することにある。この意味で本研究は、従来の研究に制度や思想の国際関係史的・社会史的な連動を織り込んだ新しい研究モデルとして、学界への貢献が期待できる。

### 3. 研究の方法

前項の目的を達成するための研究手法は、基本的に各史料の収集と、それらを用いた歴史学的な分析である。

(1) 官僚制度改革を支えた社会思想

官僚制度改革の意義を解明するために、改革を推進する人々(主動者)だけでなく、改革の結果を受容する人々(受動者)側が改革の進展にどのような影響を与えたのかを分析する必要がある。そのため、改革を下支えした社会思想についても、受動者側の視点から再検討することが求められる。受動者側の社会思想を知るためには、受動者側の意識が反映された史料の収集、分析が必須であり、そのための史料として本研究では、19世紀の官僚向け週刊紙や同人誌を取り上げた。また、官僚制度改革により新たに現場に雇用されるようになった女性労働力にも注目し、当時、女性を事務員として訓練し職場に紹介する役割を担っていた女性雇用機会促進協会の機関誌の記事から、女性を官僚制度に送り込む人々の思想や論理を追究した。

(2) 国際的な改革の情報伝播

イギリスを中心に、情報伝播を三つの点から分析する。それは、第一に発信された情報内容について、第二に情報の価値について、そして第三に国境を跨いだ人間同士の繋がりについてである。まず、イギリスの人事委員会から、日本やアメリカ合衆国、直轄植民地のマルタなど、各国政府・機関に向けて発信された情報内容を措定し、往復書簡を要点と特徴の面から検討する。続いて、逆に各国政府・機関から交換材料としてイギリスに譲渡された情報の内容から、同時代にイギリスの官僚制度改革が持った情報としての価値を明らかにする。そのうえで情報を獲得し、それをもとに自国の近代化改革を主導した人物たちとイギリスで官僚制度改革に携わった人物たちについて、人的ネットワークの介在を考察し、そのような関係性が近代化にどのように関わったかについて論じる。この

考証を通じて、近代的官僚制度の共通項としての合理化意識がそれぞれの社会で認知され、普及していく過程を検分する。

#### 4. 研究成果

##### (1) 官僚制度改革を支えた社会思想

近代官僚制度をめぐる社会思想については、近代イギリスの行政革命における科学的思想、精神について報告するとともに、イギリス国内の思想潮流が官僚制度改革に与えた役割について考察してきた。その中でも特に、効率的な業務の遂行体制を確立するうえで、改革の目玉となった女性労働力の活用について注目し、2014年5月に開催された、第19回ワークショップ西洋史・大阪において成果を発表した。

また、王立通信省文書館に所蔵されている、19世紀後半に通信省官吏たちによって発行されていた同人誌『ブラックフライアーズ』誌(1880年代)、および『セントマーティンズルグラン』誌(1890年代)の記事を収集した。これらの書誌は、郵便ネットワークを通じてイギリス国内はもちろん、植民地で勤務する郵便局職員にも読者や投稿者を獲得しており、当時の官僚制度下に組織された官吏の関心を分析するのに適している。そのため、その記事を通じて、官僚制度改革の受動者となった現役官吏たちの改革に対する意識について考察した。

加えて、通信省職員録(地方郵便局含む)から各個人レベルの情報(氏名、役職名、役職歴、昇給条件や特別手当、勤務年数など)を抽出し、当時の通信省の組織構造を復元した。その結果、官僚制度改革が本格化する以前(1873年)において、同省内の各課局においてすら職位や昇進条件が統一されておらず、経験主義的、ないしは場当たりに積み上げられた、複雑な組織形態を通じて業務が遂行されていたことが明らかになった。さらには、上述の女性労働力の活用という観点から、女性雇用機会促進協会の機関誌『イングリッシュウーマンズ・レビュー』誌の記事を用いて、当時の女性事務職員の訓練や職業紹介の状況に踏まえるとともに、女性雇用に関する言説や評価の変化を確認し、通信省の組織構造の中で、女性官吏がどのような職位や位置づけで雇用されていたかを検討した。

##### (2) 官僚制度改革の国際的な情報伝播

一方で、イギリス官僚制度改革の情報が国際的に伝播するうえで各国の動きを正当化した「近代化への模索」という論点に関しては、以前より研究対象としてきたマルタの事例について史料の翻訳を、解題の作成とともに、マルタの行政参事会のイギリス行政機構に対する関心と影響について解説した。また論説「ターザン——文明化する幸せ、文明化しない幸せ」、藤川隆男・後藤敦史(編)『アニメで読む世界史2』(山川出版社、153-172頁、2015年1月刊)を執筆し、ディズニーのアニメ映画『ターザン』をモチーフ

に、アフリカにおける「近代化」=「文明化」の伝播について考察した。(1)の研究成果と比較して、(2)については研究を進める余地が残っているため、今後も継続して検討を実施し、研究成果を発表していく。

##### (3) 新たな視座：研究の発展

さらに2016年度の夏季調査では、官僚制度改革の事例との比較対象として、20世紀後半の貴族院改革に関する調査を、ロンドンの貴族院図書館で行った。前述のとおり、近代において官僚たちは、国家と社会をつなぐ媒介であった。この官僚制度と並び、近代国家が成立するうえで重要な役割を果たしたもう一つの統治機構として、議会制度があげられる。なかでも貴族院はイギリス独自の議会制度として、1911年のロイド・ジョージ自由党政権による改革以降も、世界唯一の、旧支配層であった貴族が議席を確保する非公選第二院として現在も残存し、機能し続けている。ゆえに、これら二つの機構がいかに時代に応じて再組織化されていったかを考えることは、社会の近代化過程において、何が、なぜ必要とされたのか、そして不必要とされたのかという問いに答えることに他ならない。

以上の観点から、同調査では、ウィルソン労働党政府による、1968年の議会法案の両議院への上程に対し、改革の受動者たる貴族院議員がどのような反応と認識をみせたのかについて、法案の作成、審議の過程で作成された覚書や意見書、当時の新聞記事といった史料を収集した。この研究成果については、2016年10月に行われた第25回鷹陵史学会大会シンポジウムで発表を行った。

これらの成果発進に加え、「比較史的分析」の一部として、官僚制度改革と同時代に行われたイギリスの大学教育の変貌についても、オックスブリッジの教員の視点から論説にまとめ発表した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

水田大紀「<史料翻訳> ニコラス・ザミット(編) H・ペラ(英訳)『マルタとその産業』(ロンドン, 1886年)」『歴史学部論集』第7号(佛教大学歴史学部, 2017年3月, 113-122頁)。

[[http://archives.bukkyo-u.ac.jp/repository/baker/r\\_id\\_RO000700008598](http://archives.bukkyo-u.ac.jp/repository/baker/r_id_RO000700008598)]

水田大紀「良い就職先は良い成績から? —19世紀中葉オックスブリッジにおける大学教育の葛藤」, 佛教大学歴史学部編『歴史学への招待』(世界思想社, 2016年5月, 130-140頁)。

水田大紀「ターザン——文明化する幸せ、文明化しない幸せ」藤川隆男・後藤敦史(編)『アニメで読む世界史2』(山川出版社, 2015

年 1 月, 153-172 頁 )

〔学会発表〕(計 4 件)

水田大紀「愛されなかった改革——1968 年議会法案にみるイギリス貴族院議員の生き残り戦略——」, 第 25 回鷹陵史学会大会シンポジウム( 佛教大学紫野キャンパス( 京都府京都市 ), 2016 年 10 月 1 日 )

水田大紀「19 世紀イギリスの行政革命について——官僚制度改革の展開——」, 科学研究会「近代イギリスにおける科学の制度化と公共圏」( 代表: 大野誠, 共催: 名古屋近代イギリス研究会, 愛知県大サテライトキャンパス( 愛知県名古屋市 ), 2015 年 1 月 10 日 )

水田大紀「コメント——西洋史学の立場から」, 社会経済史学会次世代研究者育成ワークショップ 2014 <パネルディスカッション>( 社会経済史学会, 大阪大学中之島センター( 大阪府大阪市 ), 2014 年 9 月 14 日 )

水田大紀「アダムなきエデン——近代イギリスの逓信省における性別役割分業の機能について——」, 第 19 回ワークショップ西洋史・大阪( 大阪大学西洋史学会, 大阪大学豊中キャンパス( 大阪府豊中市 ), 2014 年 5 月 17 日 )

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

水田 大紀 ( MIZUTA, Tomonori )

佛教大学歴史学部・准教授

研究者番号: 40632328